

vol.50-05 (通算 566 号)

2020年8月号

やどかり

2020年8月15日発行
(毎月1回15日発行)1987年12月19日第三種郵便物認可
発行人 公益社団法人やどかりの里
代表者 増田 一世

〒337-0043 さいたま市見沼区中川562

TEL 048-686-0494

FAX 048-747-7030

URL <https://www.yadokarinosato.org/>

定価 50円 (含会費)

たどり着いたところがスタート台

増田 一世 (公益社団法人やどかりの里理事長)

1970年8月15日、やどかりの里が最初の一歩を踏み出した日だ。中間宿舎の活動からスタートし50年。この50年の節目に土橋敏孝理事長より、バトンを受け取った。

私が、やどかりの里の研修生になったのが1978年。この当時法制度もなく、やどかりの里の借家での活動は、エアコンも公用車もなく、お金もなかったが、先輩たちはエネルギーに動き、議論し、活動していた。必要なものは創り出すというやどかりの里のDNAは、法制度のない無認可時代に埋め込まれたものであろう。その原点には人権を守る強い意志があった。

活動の柱の1つだった「爽風会」(仲間づくりや社会復帰を目指すグループ)では、2泊3日の合宿が大切にされていた。共同住居の活動から生活をともにすることの意味が明確になっていたからだ。生活を大切にすると仲間づくり、もう1つの柱は「茶の間」という居場所づくりであった。病気や障害を経験し、もう一度生き直す場であり、時間だった。

1987年、精神衛生法から精神保健法に改正され、初めて精神障害者社会復帰施設が制度化された。存続の危機にあったやどかりの里の活動継続の目途がついた。そして、1990年に初めての施設を開設する(今のサポートステーションやどかり)。そこから生活支援の拠点づくりが始まり、1997年にやどかり情報館を開設し、働くことへの支援が本格化する。

2001年にさいたま市が誕生、さいたま市の政策づくりに参画し、障害の違いを越えたネットワークづくりを進めた。そして、幅広い障害者運動に関わる中で、精神保健福祉の向上を目

指した運動にも参画した。そして、1人1人が考え、行動する力を蓄えていける組織づくりを進めた。2006年施行の障害者自立支援法は逆風だったが、やどかりの里を利用する人は広がった。今では、360人のメンバーと常勤、非常勤で約100人の大所帯となった。ピアサポーターも活躍中だ。

この間、やどかりの里は、さまざまな局面で支援、協力を惜しまなかった人たちに支えられてきた。50年間を振り返ると「感謝」の二文字がまず浮かんでくる。

「たどり着いたところがスタート台」とはやどかりの里の50年を特集した『響き合う街で』93号の巻頭の藤井克徳さん(日本障害者協議会代表)の言葉だ。このスタート台には貴重な財産が詰まっている。まずこの50年間の人と人とのつながりであろう。メンバー、家族のつながり、さいたま市や全国に広がったつながり、つながっているという実感が困難に立ち向かう原動力だった。そして、互いの得手を見出していく関わり、マイナスをプラスに転じていく姿勢、そして、1人1人が自分の人生の主人公になることを目指した活動理念。やどかりの里は障害者権利条約を先取りした活動を展開し、地域づくりに参画し始めている。

11月21日に予定していた50周年式典、祝賀会は先の理事会で延期を決めたが、50年間のエッセンスを詰め込んだ出版企画、本紙での50年企画は立ち止まることなく進んでいる。

逆境にあってもこそ、本領発揮するやどかりの里だが、歴史を学び、未来を展望し、新たな活動の一步を記していきたい。